



<http://www.minamih.net/>
15・5・9(土)
南NEWS NO12

6年生交流試合

5月6日 横川小

南八王子3-1 西八王子 JFC 前半1-0
得点：井上君、小松君、高田君

南八王子1-1 平山 SC 前半1-1
得点：佐藤君

南八王子1-3 東八王子 FC 前半1-2
得点：古積君

南八王子1-0 白百合 SC 前半1-0
得点：井上君



今日のめあては、

(1) 事前の準備 => 周りを観て事前にプレーを予測して動き出すこと。プレーの動きだしが、まだまだ遅い場面が多い。ボールホルダーへの寄り(第一DFのアプローチの質)や相手パスの出どころの予測判断と動きだし、浮き球への落下地点への予測とプレーイングエリアの確保など。常に周りを観る習慣付けと得られた情報から事前に予測 → 判断して行動に移す一連の流れを判断スピードを上げていきたい。

(2) ドリブル、ターン、スクリーンを駆使したボールキープと次への展開。U-12最終節や春季カップでは、マイボールをキープできず、タメを作れないため、展開力に乏しく、蹴り合いのような試合が多くなった反省から落ち着いてボールキープすることをめあてにしました。全員の意識は高く、ターン、スクリーンを使える場面も増えて、相手を引きつけてのパス展開も何度か見られました。今後もこのめあては継続していきます。

最後に、本日をもって一連の公式戦が終了しました。

6年生は新年度からスタートしたむさしのリーグ、U-12リーグ、春季カップでは毎週のように試合をこなし、GWも1日も休まずにサッカー漬けの毎日を過ごしました。

U-12前期リーグVブロック優勝、春季カップ ベスト16という結果を残してくれました。チームの意識も高く、技術、精神力ともに確実に成長しています。改めて選手の頑張り、役員さん、親御さんのご協力に感謝いたします。

今後の目標は U-12 後期リーグに向けた更なる底上げをいかり、中央大会出場を目標に頑張ります。引き続き、ご協力をお願い致します。

by中野コーチ

今、岡田氏の著作3冊目を読んでいます。愛着についての著作です。愛着のスタイル(安定型・不安型・回避型・混乱型)による自分の性格の分析ができます。子どももより見えてきます。子ども理解に役立ちます。

以下は以前にも紹介したもので再掲です。お子さんのために読んでください。

『脳内汚染』 岡田 尊司著 文藝春秋

子どもたちの笑顔を取り戻すために p335~336

メディアの影響は、視聴者、利用者が低年齢であるほど、大きなものとなる。従来のメディアの有害性に関するものは、その内容についてのもが多かったが、嗜好性の問題については、認識があまりにも浅かったと言わざるを得ない。発達上の脳が、嗜好性をもつ強い刺激にさらされること自体が、極めて有害であり、まさにその嗜好性によって、長期間にわたって悪影響が蓄積されることにより、やがて脳は「燃え尽きた」状態に陥るのである。前頭葉の機能の低下が子どもたち全体に広がり、「発達障害」的な傾向や無気力・無関心な傾向をもった若者が平均的な存在になり、さらには「サイコパス」(精神病質者)的な特徴さえ有する若者が珍しくなくなりつつあるという事実を前にするとき、暗澹たる気持ちを禁じ得ない。

異常な少年犯罪も、無気力な子どもたちも、いつもイライラし、喜びよりも不満ばかり感じ、些細なことで命を絶ってしまう若者たちも、強烈すぎるメディアの刺激に幼い頃からさらされ続けてきたためかもしれないのだ。その全部とは言わないまでも、一部に、その影響が認められるということが、はっきり裏付けられたのである。

こうした状況において、われわれがなすべきことは、一つしかない。発達途上の子どもたちが、強すぎるメディアの刺激にみだりにさらされることから守ること。

子どもの時間は大人の時間とは、まるで意味が違う。子どもの時間は、将来その子がたくましく、懸命に生き抜いていくために、さまざまな能力や知識や経験を積み重ねなければならない貴重で二度とない時間なのである。その大切な時間が浪費されていくばかりか、それを歪めてしまうために費やされるとしたら、これは、一人一人の個人にとっては無論のこと、国家の、人類全体の未来にとっても驚異だと言えるのである。

ひとたび嗜好が形成されてしまえば、それをコントロールするのは難しい。ことにあるタイプの子どもたちでは、その罠にとらえられやすい。子どものためだと思って、何気なく買い与えているものが、その子の人生を破壊してしまう結果になるかもしれないのだ。

われわれは、そうした視点で、子どもを守っていかねばならない。メディアに対して厳しい目を向けなければならない。氾濫する有害な映像が、将来あなたの子どもを殺人者にしたり、自殺させることになるかもしれないのである。そして、あなた自身も、知らず知らずそうした危険にさらされていることを自覚すべきである。

岡田 尊司 医学博士 医療少年院勤務

